

# 「犬との触れ合いを通じて、不安を和らげてあげたい」

相棒のゴールデンレトリバー「ベイリー」(雄5歳)と一緒に、森田優子さん(32)が入院病棟に入ると、待ちわびていた子どもたちがあちこちの病室から顔を出した。小児がん拠点病院の神奈川県立こども医療センター(横浜市南区)。森田さんとベイリーがここに常駐するようになって、間もなく1年5か月になる。

## 生きる 語る

ベイリーは、病院で治療を支える「ファシリテーター」の国内第一号。日本にはまだ2頭しかない。看護師の資格を持つ森田さんは、ベイリーとペアを組み「ハンドラー(調教者)」。だ。生活も通動もいつも一緒にペアは、センターに入院する約360人の子どもたちの精神的な支えになっている。

たんぼく漏出性胃腸症で入院している鈴木誠君(9)が、ベイリーを自分のベッドに乗せた。「ベイリーの特技って何?」「何歳まで生きるの?」「ベイリーは子どもたちの検査や歩行訓練に付き添い、薬を飲みながらいない子の前で犬用の栄養補

# 病床の子に笑顔贈る

助カプセルを一口でのみ込んでみせることもある。大嫌いな注射もベイリーと一緒に頑張り手も多し。「病気を治せるわけではないけど、動物には人を元気づける力がある。ベイリーがいることで、つらいことの多い病院を少しでも楽しい場所に変えられる」

森田さんは、静岡県東部の

の函南町で自然に囲まれて育った。静岡県立大の看護学部を卒業し、東京の病院で小児科の看護師になった。子どもたちを笑顔にしたいと思っていたが、現実

は点滴の交換や検温などに追われ、心を通わせる余裕はなかった。入院した子どもたちの表情はだんだん暗くなっていく。理想と現実のギャップは大きかった



「ベイリーがいることで、つらい入院を少しでも楽しく」



▲一緒に鈴木誠君(左)を訪問した森田優子さん(右)と、横浜市こども医療センター(11月23日撮影)のファシリテーター。守谷遼平撮影

ファシリテーターは、治療を支える犬。患者の不安や緊張を和らげるために遊び相手になったり、診察や検査に同行したりする。専門の訓練を受け、衛生上も厳しく管理され、ハンドラーは医療現場で働いた経験のある看護師らが務める。米国では一般病院での導入例も増えている。日本ではベイリーと、静岡県立こども病院に「ヨギ」がいる。

ベイリーと一緒に、初めての職場となったのが10年1月に派遣された静岡県立こども病院(静岡市)だ。「衛生的に大丈夫なのか」「病院に犬を入れるなんて非常識だ」といった声もあった。犬が苦手な子どももいるので、自分たちから病室に入っていくことはできない。それでも廊下を歩いていると、多くの子どもに囲まれるようになった。

ある米ハワイに飛んだ。そこで出会ったのがベイリーだ。ほかの犬より3センチポくらい遅い、ちよつと間が抜けた姿を見た瞬間、「気が合う」と感じた。ベイリーと付きっきりで病院で求められる振る舞いや動作を繰り返し、犬の心理や特性も学んだ。

最初に仲良くなったのは脳腫瘍で入院していた2歳の寺尾悠月君だった。手術したばかりで集中治療室にいた悠月君の小さな体には、何本ものチューブが繋がれていた。両親に抱かれてベイリーに近寄ると、うれしそうにベイリーに触った。喉の呼吸用チューブのため話すことはできなかったが、ベイリーに必死に話しかけようとした。時間があるとき悠月君を訪ねるようになった。ベイリーが来るとハイハイで近寄ってきて、両親も驚くような笑顔を見せた。

「病室は制約も多いけど、犬と触れ合うという普通の体験を通じて、病室と闘う子どもたちが抱える不安やストレスを少しでも和らげたい。たとえ短い生涯だったとしても、僕は毎日、子どもたちのことを思い出す。かわいそうだなと思ったじゃない、病院でも笑っていたねって思い出せるようにしてあげたい。ファシリテーターのこともっと知ってもらいたい、日本の病院に笑顔を広げていきたい」

「病室は制約も多いけど、犬と触れ合うという普通の体験を通じて、病室と闘う子どもたちが抱える不安やストレスを少しでも和らげたい。たとえ短い生涯だったとしても、僕は毎日、子どもたちのことを思い出す。かわいそうだなと思ったじゃない、病院でも笑っていたねって思い出せるようにしてあげたい。ファシリテーターのこともっと知ってもらいたい、日本の病院に笑顔を広げていきたい」

(中村勇一郎)